



木地屋の里通信

2025. 春号 (4/15)

発行：木地屋民俗資料館

今年は2月に入ってから二度の大型寒波で暖冬ムードが一転、すっかり大雪の冬となってしまいました。木地屋の里では最高で3m50cmの積雪を記録し、久しぶりに資料館の屋根雪下ろしを実施、集落が管理するお堂では二度の除雪となりました。そんな今年の冬でしたが、ようやく桜の季節となりました。

今号では資料館閉館後の経過報告と合わせて、昨今注目されている民具資料をめぐる話題などをお伝えします。私たちが取り組んでいる活動の意義をもう一度見つめなおし、新年度の活動に向けて気持ちを新たにしたいと思います。

なお、木地屋の里の整備が始まって以来管理組合の所管課であった農林水産課からこの4月1日をもって教育委員会文化振興課に所管換えとなりました。これによって施設の維持管理（いわゆるハード事業）と資料の保存展示や様々な文化財活用事業（ソフト事業）が教育委員会に一元化されることになります。農林水産課の皆さんには長い間大変お世話になり、ありがとうございました。

また文化振興課には昭和60年代の資料調査にはじまり、国指定に向けた平成の取り組みなど文化財保存活用についての長い経過を受け継いで、今後の施設のさらなる充実と資料館活動の進展にご指導を頂きたく、よろしくお願い致します。なお資料館の運営形態は従前どおり市の施設の運営を木地屋の里施設管理組合が委託契約によって受託する形であり、変更はありません。

前述したように今年は雪が多く、開館に向けたスケジュールを決められないでいます。いずれにしても4月中には雪囲いの撤去を済ませたいと考えています。追って日程の連絡をしますので、皆様のご協力をよろしくお願いします。

（1）閉館後の経過報告

- 11月 2日 浄化槽フロア囲い設置工事完了（農林水産課所管工事）
〃 正面玄関雪囲い部材等修理工事完了（木地屋の里事業）
- 11月 9日 資料館雪囲い（組合と想木舎）
- 12月 21日 想木舎研修会（1）ブータンのろくろについて
- 1月 19日 想木舎研修会（2）ブータンの漆器について
- 2月 2日 お堂屋根雪除雪（1回目）（集落実施事業）
- 2月 12日 資料館屋根雪除雪（組合）
- 2月 22日 木地屋民俗資料館冬季出前講座Ⅰ（糸魚川公民館 大研修室）
(1) ブータンのろくろについて（17人参加）
- 3月 1日 お堂屋根雪除雪（2回目）（集落実施事業）
- 3月 15日 木地屋民俗資料館冬季出前講座Ⅱ（糸魚川公民館 大研修室）
(2) ブータンの漆器について（27人参加）

フォトアルバム-1



11月9日 資料館雪囲い



2月2日 お堂の屋根雪



お堂の屋根雪下ろし(2/2・3/1) ↑・↓



2月12日 資料館の屋根雪下ろし ↑・↓



←↑やれやれ、大変な雪だった!



(2) 冬季出前講座

今までにも閉館後の12月から冬期間にかけて何度か講座を開いてきましたが、特に位置づけのないものでした。今回は「**木地屋民俗資料館冬季出前講座**」というタイトルのもとに2回開催しました。資料館活動は本来通年に渡って行われるものですが、木地屋の資料館は降雪期は閉館となるために活動も休止状態となっておりました。何かこの時期にふさわしい活動ができないか、こんな発想でこの冬季出前講座を開設しました。館は雪に閉ざされていますが、出前講座という形で毎年さまざまなテーマを取り上げて実施していきたいと考えています。

2月22日 木地屋民俗資料館冬季出前講座Ⅰ（糸魚川公民館 大研修室）

(1) ブータンのろくろについて（17人参加）

3月15日 木地屋民俗資料館冬季出前講座Ⅱ（糸魚川公民館 大研修室）

(2) ブータンの漆器について（27人参加）

講座の設営・進行は想木舎が担当し、報告は館長が昨秋調査を行なったブータンの木地屋について現地の映像を交えて話しました。

2月22日は朝から雪が激しく降るあいにくの天候でしたが17名の方が、また2回目の3月15日は好天に恵まれて27名の皆さんから参加頂きました。幸いどちらの講座も、とても面白い話だったと好評を頂きました。それというのも、とにかくブータンの話題はどれをとっても現代日本の社会では想像できない不思議で面白い話ばかりだったからです。さらにいえば、殺伐とした昨今の世界情勢のなかでぽっかりと穴が開いたような、平和でのかな別世界を覗いてみた、そんな癒しの話題だったのかもしれない。

電車もなく、高速道路もなく、信号もなく、人々は全員伝統の服で毎日を過ごしています。漆器づくりも、昔ながらの技術で木地を挽いていますが、それが目を見張る様なとてもユニークなものであったということです。懸念するのはこれがいつまで続くのか、です。

フォトアルバム-2

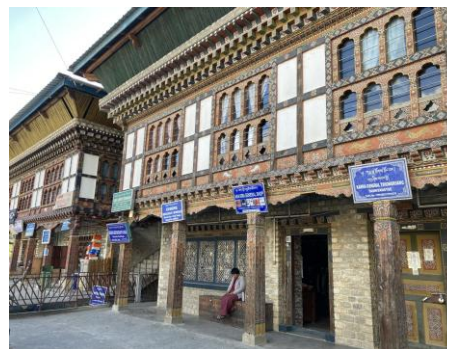


三月十五日の出前講座の様子。皆さんから熱心に聞いて頂きました。

ろくろに火が！
講座の一番の見どころは、このユニークなろくろ技法。



漆器は擦り漆で木目を生かしたものだ。この木目がブータンの人々には大事なのです。



【ブータンのろくろ技法…どこがユニークなのか？】

ろくろは一種の木工旋盤ですから回転軸に材料を取り付けなければなりません。日本では軸端にある4本の鉄爪に材料を打ち付けるのが伝統技法です。ネパールや中国では軸端が凹状のカップになっていて、そこに材料の凸部を打ち込みます。ブータンは？なんと接着剤を火で融かして材料を貼り付けるのです。その接着剤がラックカイガラムシという虫から取った物質というから、やっぱりユニークです。

(3) 民具資料をめぐる動き

民具資料をめぐる、いま関係者の間で熱い議論が交わされています。関係者とは民俗や民具を専門とする学芸員、研究者、博物館・資料館の職員などで、残念ながら議論の広がりはずしも世間全般とはなっていないようです。ここでは、そんな熱い議論の背景と現状について最近の話題とともに紹介します。

ことの発端は奈良県でした。ここには日本有数の民具資料を蔵する県立民俗博物館があり45,000点の民具が収集保管されています。問題は、膨大な資料が未整理のまま廃校舎等の仮置き場にうずたかく積み上げられていること。この現状に対して県知事が廃棄処分を指示したことがマスコミで大きく取り上げられ前述の関係者を驚かせたのです。そして2024年7月の日本民具学会の緊急声明へと発展しました。この声明は貴重な民具資料の価値と収集保存の意義を強く訴えるもので、その後民俗学・考古学・歴史学など多くの学術団体から賛同の声が上がり、これらの団体と改めて連名で声明を発出するに至っています。

以上が昨今の民具をめぐる議論の発端と経過です。このうち大阪にある国立民族学博物館が、民俗文化財の災害救出支援と廃棄問題の2つのテーマを掲げて公開シンポジウムを開催(2025.1.26)、会場参加とオンライン参加を合わせて多くの人たちが活発な議論を展開しました。(想木舎会員によるレポートを別添折込みしましたので、詳しくはそちらを参照ください。)

また廃棄問題とは直接のかかわりはありませんが、新潟県立歴史博物館でも民具資料の企画展が開催されました。[『生活の証拠品が民具である…山口賢俊がもったコレクション』(2025.2.8~3.23)]県内有数の民具コレクションが熱意ある個人によって築かれ、収蔵場所を転々としながら現在に至っている経過が貴重な民具類とともに紹介されていました。

(もしかしたら、この「**もった**」という言葉に廃棄問題に対する主催者の思いが込められているのかもしれませんが。)同館では3月8日にこの企画展の解説講座を開いて民具資料収蔵の意義を訴えました。



国立民族学博物館のシンポジウムの様子
参加者とパネラーが熱い議論を(2025.1.26)



新潟県立歴史博物館の山口賢俊コレクション展
山口賢俊の活動紹介と展示の様子(2025.3.8)

【あとがき】

季節の変わり目、年度の変わり目・・・文化財をめぐる考え方の変わり目(!)いろんな変わり目があって今号は量が多く話題也多岐にわたるものになりました。

ただ、そんな中であって変わってはいけないものもある、と感じています。それは先人が残してくれた歴史遺産の価値です。以下の引用は民具学会会長神野善治さんからのメッセージです。

失われた多様な先人の「知恵と技」に気づき、再発掘のチャンスを探る道はまだ残されている・・・

この「危機」を「民具の価値の再評価」のチャンスと捉え、その本質的な意義を引き出す具体的方策を皆さんと探りたいと思います。

廃棄を問うシンポジウムのレジュメの締めくくりの部分を掲載しました。(H)